

学習院大学史料館 第17回特別展

「徳川義親侯と ユーラップ・アイヌ」



右 徳川義親氏・左 椎久年歳氏

学習院大学史料館

構成・執筆
佐々木利和
(学習院大学史料館客員研究員・東京国立博物館)
谷本 晃久
(学習院大学大学院)
西田かほる
(学習院大学史料館)

第17回特別展	徳川義親侯とユーラップ・アイヌ
会 期	1997年11月1日(土)～11月29日(土)
編集・発行	学習院大学史料館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 TEL.03-3986-0221
発行年月日	1997年10月
印 刷	株式会社シータス

会 期	11月1日(土)～29日(土)
開室時間	10:00～16:30(土曜日は11:30まで) 日曜日・11/24は休館
会 場	学習院大学史料館展示室(北2号館1階)
入 場 料	無料

はじめに

アイヌの人びとは日本列島の先住民として、アイヌ語をはなし、狩漁に基礎をおいた独自の文化を育んできた。本州以南に盛行した、いうところの「日本文化」とはかなり性格を異にしていたため、「日本文化」を育んだ人びとからはともすれば偏見や誤解にみちたまなざしで見つめられてきた。そのみか、アイヌの人びとの文化や歴史は、学校教育の中で正しく教えられることも、学ばれることもなかったといっている。もうひとつの日本文化であったにもかかわらず。

本学には、教育資料としてわずかな点数ではあるがアイヌ文化に関わる資料が伝えられている。1926年（大正15）に愛知県立明倫中学校附属博物館から寄贈されたものである。明倫中学の前身は尾張徳川家の私学校に由来する。ユーラップに入った尾張徳川家は北海道の早くからの開拓者であり、アイヌの人びととの交流も深い。寄贈されて70年。その資料を中心にささやかなアイヌ文化の展示会をこころみた。アイヌ文化を知るうえでは、もとより充分な資料とはいえないが、それをもとに尾張徳川家とアイヌの人びととの交流のあとをたどってみたい。

折しも、「アイヌ文化振興に関する法律」が制定された。その記念すべき年のこの小さな展示会がアイヌ文化の理解にいささかでも貢献できれば、と思う。

学習院大学史料館



上: 椎久年蔵氏、下: 徳川義親氏ともに大正期の熊狩り風景

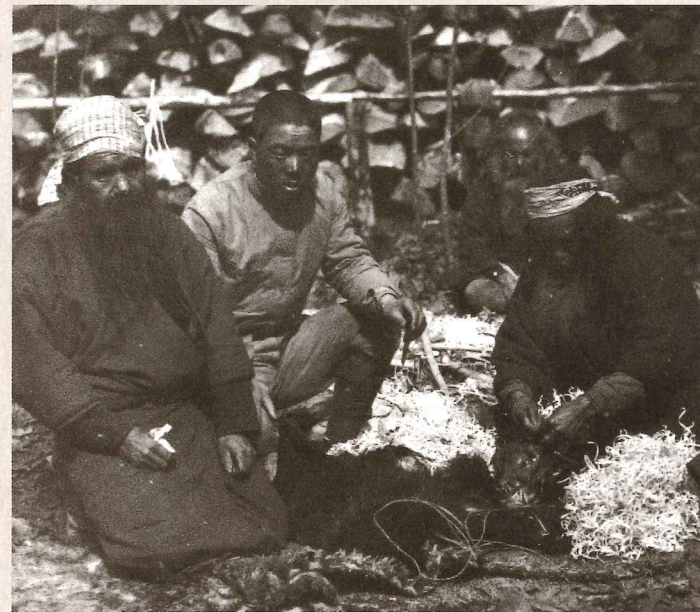


優れた農場主として、互いに敬意を払っていたことは疑いない。大正期から戦後まで続けられたふたりの交友であるが、アイヌと侯爵という関係よりも、熊狩りが結んだ人と人の交わりがあったというべきであろう。

熊送り

アイヌ文化といえば、誰しもが「熊祭り」を思い浮かべるほど、その儀礼は有名であるが、その実態は意外に知られていない。「熊祭り」、正しくはイオマンテといい、「熊送り」と訳される。アイヌ文化のなかでは、熊をはじめとする動物はすべて霊的な存在であって、神の国（カムイ・モシリ）で人間と同じ姿形で暮らしている。豊かな人間の国（アイヌ・モシリ）に遊びに来るときに、熊の神は黒い毛皮を着た熊の姿となるのである。毛皮や肉、そして熊の胆などは人間（アイヌ）へのおみやげとして身につけてきた。

アイヌは神の国からの客人をさまざまにもてなし、饗応する。うたげがはてて、熊の神が神の国に帰るとき、そのままの姿では帰ることができないから、アイヌの手でその衣服（毛皮）を脱がせてもらう。その時、神は耳と耳とのあいだにましますという。アイヌは熊の神に敬虔に接し、深い信仰心をもって、荘厳に儀礼をとりおこなう。



熊の頭骨に化粧を施す（ウンメムケ）

近代になって、イオマンテはともすれば動物の命を奪う野蛮なかつ残酷な行為とみなされたが、これはアイヌの人びとの文化や宗教を理解することのない皮相な見方であった。

徳川義親氏は狩猟を趣味とし、ユーラップ・アイヌの椎久年蔵氏らを友として熊狩りに勤しんだ。狩漁民であるアイヌの人びとの心性と共感があつたのであろうか、いくたびかのイオマンテを主宰している。

1952年（昭和27）に執行されたイオマンテは、ユーラップのみならず、噴火湾岸に住むアイヌの人びとにとって最後の儀礼となった。



儀式をとり行う義親氏（昭和初期）

徳川義親氏と椎久年蔵氏

徳川義親氏（1886～1976）は、松平慶永（春嶽）の5男として東京に生まれた。長じて1908年、尾張徳川家を継ぎ、侯爵となる。氏は尾張徳川家の家政改革を行い、また貴族院議員として政治活動の傍ら、生物学と林政史の研究所を設立するなど、多彩な活動を行った人物として知られる。八雲徳川農場主としては、1912年（大正元）に旧藩士75戸を自作農として独立させ、以後、残りの小作地を農場として経営していくこととなった。1918年以降は毎年のように八雲を訪れ熊狩りを行い、それは1952年（昭和27）にまで及んでいる。

椎久年蔵氏（1884～1958）は、義親氏と最も長きにわたって熊狩りを共にしたユーラップ・アイヌで、アイヌ名をトイタレキといった。年蔵氏はユーラップ・アイヌの世話役として生活の近代化に尽力するとともに、言語学や民族学の分野では、渡島半島地域随一の伝承者として知られていた。年蔵氏が近代化の推進者としての姿を見せる一方で、戦後に至るまでアイヌの言語・文化の伝承者として活躍した背景の一端には、こうした義親氏との熊狩りを通じた親交があったとはいえないだろうか。

その親交の実態を詳しく述べる余裕はない。ただ、義親氏は年蔵氏を熟達した狩猟巧者として、年蔵氏は義親氏を

コラム

〈ユーラップ・アイヌ〉

ユーラップ（遊楽部）川口にコタン（村落）を営んでいた、もともと和人地（日本人のすんでいる地域）に近いアイヌの人びとである。早くから和人（日本語を母語とする人びと）との交流があったが、意外なことにその文化は紹介されてはおらず、まとまった記録もない。

ユーラップは現在の北海道山越郡八雲町である。

ユーラップ・アイヌの物質文化の一部は市立函館博物館に保管されている。

〈八雲町〉

八雲町は、北海道渡島半島の北部に位置し、東は内浦湾（噴火湾）、西は渡島山系に接する。面積は約736km²、広大な町域を遊楽部川・落部川・野田追川が流れる。

「八雲町」の町名は、1878年（明治11）にユーラップに入植した旧尾張徳川家藩主徳川慶勝が、1881年（明治14）に、豊かで平和な理想郷の建設を願い、「八雲立つ 出雲八雲垣妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」のうたを引いて名付けた。

現在では、世帯数6,900世帯、人口18,365人（1996年版『八雲町町政要覧』）で、栽培漁業・農業・酪農が行われている。八雲町は、木彫熊のほか、バター飴の発祥の地としても有名である。

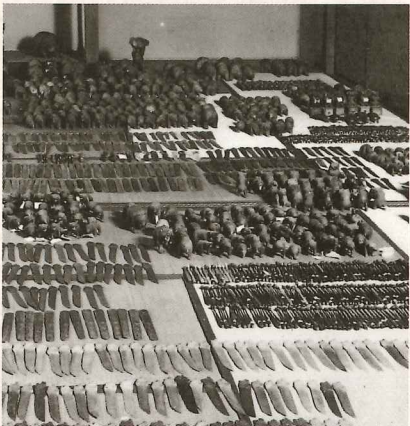
八雲の木彫り熊

アイヌの民芸として広く知られている木彫の熊。近年でこそ、その人気は衰えたが、北海道の代表的なみやげものでもある。この熊は、アイヌ文化に伝統的に伝えられたものではなく、実は八雲において始まったことを知る人はすくない。

八雲の熊彫りは大正年間に徳川義親氏が、徳川農場における農民たちの冬の授産と農村芸術運動のため、スイスから持ち帰った木彫りの熊をモデルに、その制作を指導したことに由来する。その後、旭川アイヌがその技法とデザインを習得して、狩漁民族としてのアイヌの工芸品というイメージづくりに成功し、戦後、北海道全域のアイヌの人びとの間に広まっていった。

アイヌ文化には宗教儀礼に用いる祭器以外に熊の彫刻を行わない。したがってユーラップ・アイヌが熊の木彫制作に積極的に関与したわけではなかったが、義親氏はアイヌの木彫技術を高く評価しており、熊彫りがはじめられる以前の、たとえば「八雲村農村美術工芸品評会」においてアイヌの人びとの木彫技術への注目をうながしている。

結果的にアイヌの木彫品が八雲の特産品となることはなかった。しかし、その可能性とともに義親氏および徳川農場とユーラップ・アイヌとは木彫技術を通じた交流があり、木彫の熊誕生の母体となった農村芸術運動とは決して没交渉ではなかったのである。



「八雲村農村美術工芸品評会」に出品された黎明期の木彫り熊



幣棚を前に義親氏を囲むユーラップ・アイヌの人々(昭和期)

出展資料リスト

資料名	資料番号および所蔵者		
蛙皮靴	旧制学習院歴史地理標本室移管資料	28	学習院大学史料館所蔵
織機	旧制学習院歴史地理標本室移管資料	77・80	学習院大学史料館所蔵
わらじ	旧制学習院歴史地理標本室移管資料	86	学習院大学史料館所蔵
カンジキ	旧制学習院歴史地理標本室移管資料	135・136・137・138	学習院大学史料館所蔵
矢筒	旧制学習院歴史地理標本室移管資料	289	学習院大学史料館所蔵
矢	旧制学習院歴史地理標本室移管資料	230	学習院大学史料館所蔵
木綿製上衣（ルウンベ）	民族資料	27	市立函館博物館所蔵
胸飾（タマサイ）	民族資料	86	市立函館博物館所蔵
耳環（ニンカリ）	民族資料	100	市立函館博物館所蔵
盆	民族資料	198	市立函館博物館所蔵
銚頭	民族資料	454	市立函館博物館所蔵
穂摘用具	民族資料	473	市立函館博物館所蔵
木幣（イナウ）	民族資料	495	市立函館博物館所蔵
木幣（イナウ）	民族資料	496	市立函館博物館所蔵
酒を捧げる祭具（イクバスイ）	民族資料	694	市立函館博物館所蔵
酒を捧げる祭具（イクバスイ）	民族資料	695	市立函館博物館所蔵
酒を捧げる祭具（イクバスイ）	民族資料	696	市立函館博物館所蔵
酒を捧げる祭具（イクバスイ）	民族資料	697	市立函館博物館所蔵
食べら	民族資料	698	市立函館博物館所蔵
花矢	民族資料	699	市立函館博物館所蔵
徳川家拝領台付盃	民族資料	724	市立函館博物館所蔵
サイモン用具	民族資料	729	市立函館博物館所蔵
数取	民族資料	730	市立函館博物館所蔵
蝦夷拵太刀	民族資料	788	市立函館博物館所蔵
蝦夷拵太刀帯	民族資料	806	市立函館博物館所蔵
喫煙具	民族資料	964	市立函館博物館所蔵
アットウシ布	アイヌ民族資料	27899	東京国立博物館所蔵
木綿製上衣	アイヌ民族資料	27888	東京国立博物館所蔵
木彫熊			八雲町郷土資料館所蔵
木彫熊			個人蔵
井原西鶴著『一目玉鉦』			学習院大学日本語日本文学科所蔵
永楽舎一水著『義経蝦夷勲功記』			学習院大学日本語日本文学科所蔵
松浦武四郎著『西蝦夷日誌』 他			学習院大学図書館所蔵
（民族絵巻）	奥州棚倉藩主阿部家文書	1543	学習院大学史料館所蔵

尾張徳川家所蔵写真資料

【参考文献】

- 徳川義親 『熊狩の旅』（精華書院、1921年）
- 服部四郎編 『アイヌ語方言辞典』（岩波書店、1964年）
- 林善茂 「徳川農場発達史」
（『北海道大学経済学研究』5・6・13、1953～1957年）
- 大塚和義 「アイヌの木彫熊」（『月刊みんぱく』6-4、1982年）
- 『改訂 八雲町史』（八雲町役場、1984年）
- 佐々木利和 「イオマンテ考—シャモによるアイヌ文化理解の考察—」
（『歴史学研究』613、1990年）
- 徳川義宣 『殿様のひとり言』（思文閣出版、1994年）
- 大石 勇 『伝統工芸の創世—北海道八雲町の「熊彫」と徳川義親—』
（吉川弘文館、1994年）
- 斎藤玲子 「北方民族文化研究における観光人類学的視点（1）
—江戸～大正期におけるアイヌの場合—」
（『北海道立北方民族博物館研究紀要』3、1994年）

本展の開催にあたり、次の方々に御協力いただきました。深く感謝の意を表します。

徳川義宣
徳川春子
大給義龍
高橋博子

アイヌ民族博物館
市立函館博物館
東京国立博物館
函館市北方民族資料館
八雲産業株式会社
八雲町郷土資料館

学習院大学日本語日本文学科
学習院大学図書館
（敬称略）